エージェンシーを発揮する生活科の学びに関する研究

～小学校第２学年の「町探検」に関わる単元において～

徳永　真衣＊1・藤上　真弓

A Study of Living Environment Studies that Demonstrates Agency:
In a unit related to "town exploration" in the second grade of elementary school

TOKUNAGA Mai＊1，FUJIKAMI Mayumi
（Received December 14, 2023）

キーワード：エージェンシー、well-being、生活科、町探検、思いや願い

はじめに

「ＯＥＣＤラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」において用いられている「生徒エージェンシー」は、「Student Agency for 2030 仮訳」によると、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」（秋田ら、p.３、2020）と定義されている。「働きかけられるとうよりも自らが働きかけることであり、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ることであり、また他人の判断や選択に左右されるというよりも責任をもった判断や選択を行う」（秋田ら、p.３、2020）子どもの育成を目指して、教育の在り方が問い直されている。

生活科は、「具体的な活動や体験を重視し、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」（文部科学省、2018、p.８）を育成することを目指している。生活科は創設当初から、子どもたちが「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」（文部科学省、2018、p.11）いくための資質・能力を育成することを目指してきた。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編』によると、「学習上の自立」とは、「自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるということ」（文部科学省、2018、p.11）、「生活上の自立」とは、「生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切に関わることができるようになり、自らよりよい生活を創り出していくことができるということ」（文部科学省、2018、p.11）「精神的な自立」とは、「自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方を求めていくことができるということ」（文部科学省、2018、p.11）と説明されている。どの説明を見ても、「ＯＥＣＤラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」にも示されているwell-beingを実現するための資質・能力を、これまでも子どもたちに育成してきた教科であると言える。

生活科においては、「身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」（文部科学省、2018、p.10）ていく子どもの姿が求められているが、「身近な生活に関わる見方」は、「自分との関わりによって対象を捉える」（久野、2017、p.61）ことであり、「身近な生活に関わる考え方」は、「『思いや願い』を実現しようとして考えたり工夫したりすること」（久野、2017、p.61）であると解説されている。これからも分かるように、生活科は、自分との関わりで自分の身のまわりの人・もの・ことを捉え、「やってみたい」「もっと～したい」等と自分の「思いや願い」の実現のために、考えたり工夫したりして自ら学びに向かっていこうとする姿が生まれてくるような学びが展開されていく。生活科は、創設当初から、子ども主体であり、子どもにとっての自分事の学びとなっていくような学びを保障することが求められてきたのである。

ここで考えておかないといけないのは、「思いや願い」とはどのようなものであるのかということである。

＊1　山口大学教育学部附属光小学校

嶋野（2018）は、「思いや願い」について、「夢や希望」「目標や目当て」と比較しながら、表１のように定義している。

表１　「思いや願い」「夢や希望」「目標や目当て」の違いについて

夢や希望	目標や目当て	思いや願い
今の自分では実現できないけれど、いつか実現してみたいもののこと	今の自分ががんばれば実現できそうなもののこと	「夢や希望」ほど大きくて遠くはなく、「目標や目当て」ほどにははっきりしていないけれども、常に生まれて、自らしてみたいこと

（嶋野、2018、p. 213、p. 214 より抜粋・整理）

嶋野（2018）が、「目標や目当てを持った子供は、それを目指して、考え合い、励まし合うなどしながら活動します。思考力や判断力などが活発に働くとともに、主体的で協働的になっていきます。」（p. 214）と述べているように、子どもたちが自分がもっている「思いや願い」を自覚し、それが自分なりの「目標や目当て」となっていくように単元をデザインしていかなければ、「身近な生活に関わる考え方」を生かしていこうとする子どもの姿を生み出すことは難しいことが分かる。そのため、単元をデザインしていく際に、教師は、まずは子どもたちにどのような「思いや願い」をもってほしいのか、「思いや願い」を醸成するためにはどのような活動が必要なのか、「思いや願い」を顕在化していくためにはどのような手立てが必要なのか、「思いや願い」はどのように変わっていくのか等について吟味する必要がある。生活科において、子ども一人ひとりがエージェンシーを発揮するために、教師は、教師が出る場とそのタイミング、度合いを見極め、子どもたちの探究心に火を付け、自ら「身近な生活に関わる考え方」を生かそうとする子どもの姿を生み出していくことが求められるのである。教師が放任するのでも、レールを敷くのでもなく、子ども一人ひとりが自分なりの見通しをもって歩み出す姿を生み出していくことができるような手立てを模索していく必要がある。

１．研究の目的と方法

１－１　研究の目的と方法

山口大学教育学部附属光学園の生活部では、対象と自分との関わりに気付き、生活を豊かにする子どもを育成する授業を、教科の本質に迫る授業であると捉えている。また、「エージェンシーを発揮している姿」を、「思いや願いの実現に向けて、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし自ら働きかける姿」（徳永、2023）と捉えている。

「エージェンシーを発揮している姿」は、例えば、図１のように単元を通して「思いや願い」の種類や強さを変えながら現れてくる。

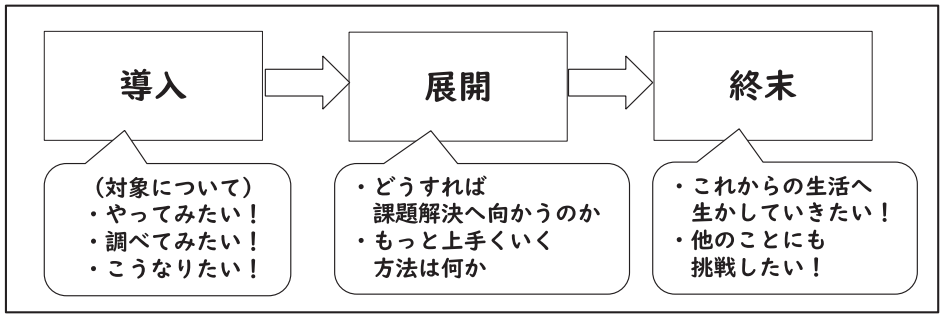


図１　単元の過程におけるエージェンシーを発揮している子どもの「思いや願い」の種類や強さの変容例

本研究においては、「生活科におけるエージェンシーを発揮している姿」を「『思いや願い』の実現に向けて、自ら働きかける姿」であると仮定し、「具体的な活動や体験を充実させる」、「子どもに表現内容や

方法を選択・決定を促す」２つの手立てを行っていく。

本研究では、この２つの手立てが、生活科で目指す子どもの姿を具現化するために有効であったか、分析し、生活科におけるエージェンシーを発揮するために効果的な学びの在り方について考察していくことを目的とする。

１－２　２つの手立てを行う意図

１－２－１　具体的な活動や体験を充実させる意図

生活科の学びでは、具体的な活動や体験を充実させることで、子ども自身の「やってみたい」や「こうしたい」といった「思いや願い」が育まれていく。単元の初めに対象とたっぷり触れ合う時間を設定することで、「思いや願い」をもち、自ら行動し始めるための原動力とする。

１－２－２　子どもに表現内容や方法の選択・決定を促す意図

子どもが「思いや願い」を膨らませながら経験したことを表現する際に、あらかじめ教員の設定した枠組みで活動を制限すると、次第に子ども自身がもつ思いや願いは薄らいでしまうであろう。共通の目的意識は必要であるが、その下で子ども自身が表現内容や方法を自分の意思で選択・決定し、のびのびと活動できるようにする。

２．研究の実際

２－１　単元名と取り扱う内容、目標

単元名は、「こんなにすてき！ わたしたちのまち～つながる 広がる わたしの生活～」であり、内容「⑶地域と生活」を中心に取扱う単元である。本単元では、地域に関わりその様子を身近な人々に伝える活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えたり、相手のことを想像して伝えることや伝え方を選択したりすることができ、地域と自分との関わりやそれらを支えている人々の存在、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、地域への親しみや愛着をもち、進んで触れ合い交流しようとすることを目標として設定した。

２－２　単元について

本単元は、自分たちの生活は、様々な場所だけではなく地域で生活したり働いたりしている人々とも関わっていることに気付いていく単元である。また、相手を想像しながら伝え方を工夫することで、身近な人々と関わることのよさや楽しさについても気付いていくことが期待される。本単元では、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々、伝える身近な人々と自分とのつながりに気付き、実生活における地域や身近な人々と自分との関わりを広げようとすることを大切にして実践することとする。

本単元は、内容項目「⑶地域と生活」を中心として小学校第２学年の１月に行った実践であるが、それまでの７月や 11 月にも町探検を行い、グループに分かれて、計６つの場所を見学している。子どもが地域への親しみをもち、自ら関わりたいという「思いや願い」をもてるようにするには、年間を通して何度も対象と触れ合うことが重要であると考えたためである。

７月や 11 月の町探検で、何度も対象と繰り返し関わることで、地域に対する「思いや願い」を膨らませ、自ら対象に関わろうとする姿が見られるようになった。また、思いや感じたこと、気付いたこと等を様々な方法で表現する中で、地域に対する認識をより確かなものにしていく姿を見取ることができた。

本単元においては、これまでの学びや学びで得たものを生かして、過去に見学した６つの場所について、まだ知らないことやもっと知りたいことをもう一度見学して調べることで、これまで地域の場所やそこにあるものに関心をもっていた子どもたちが、そこで生活している人々にも意識を向けられるよう構想した。地域について知らないことをさらに詳しく知ろうとする思いの下、活動と表現を繰り返す過程で地域についての気付きを深め、伝える内容や方法に意思をもって選択・決定する場を設定する。子どもが、地域について身近な人々へ伝えたいという「思いや願い」をもち、どうすれば自分の思いが相手に伝わるかを話し合う様相がエージェンシーを発揮した姿だと考え、手立てを行っていった。

２－３　単元計画とエージェンシー

表２は、本単元の計画とエージェンシーを発揮するための手立てである。

表２　単元計画とエージェンシーを発揮するための手立て

次	学習活動・学習内容	エージェンシーを発揮するための手立て
一②（本時２／２）	○これまでに訪問した施設や店は、どのような場所かを振り返る ・町探検や施設見学で分かった情報 ●施設の利用方法や店のよさなど、さらに詳しく知りたいことを考える（本時） ・詳しく知りたい内容	・訪問した施設や店の様子の交流による、地域への親しみや思いを想起させる表現活動 ・施設や店のよさについて知らない内容があることに気付かせる発問
二⑧	○分かっていることを整理し，知りたい情報を収集する ・地域についてさらに知りたい情報 ・調べる手段や尋ね方 ○地域について調べ、さらに分かったことを整理する ・地域についてさらに分かった情報 ・各グループが調べた地域の情報 ○地域について伝えたい人にどんな思いになってほしいかを話し合い、地域について伝える内容や方法を選択する ・伝える対象の立場 ・対象へ伝える内容や方法 ○伝えるための表現方法を決定し、表現活動を行う ・表現方法 ・目的による伝え方の違い	・自分が知っている伝えたいことと、もっと知りたいことの整理 ・伝える内容についての中間発表と、グループでの質問や感想の伝え合い ・伝えたい身近な人々や、その人の立場によって伝えるべき情報の検討と表現活動 ・表現方法とその効果、相応しい伝え方の検討
三②	○自分の調べた地域について、身近な人々に伝える ・地域についてグループで調べたこと ・身近な人々に伝える楽しさ ○地域や身近な人々と自分の実生活とを関連付け、今後自分がどのように関わっていきたいかを話し合う ・地域や身近な人々と自分とのつながり ・地域や身近な人々と自分との関係の広がり ・地域や身近な人々に対する自分の思い	・身近な人々へ伝えた後の反応を知り、自分の成長を実感できる機会 ・地域と自分の生活とのつながりや、今後の実生活の広がりについて考える表現活動・伝え合い

図２は、単元の中で子どもがエージェンシーを発揮している姿のイメージである。

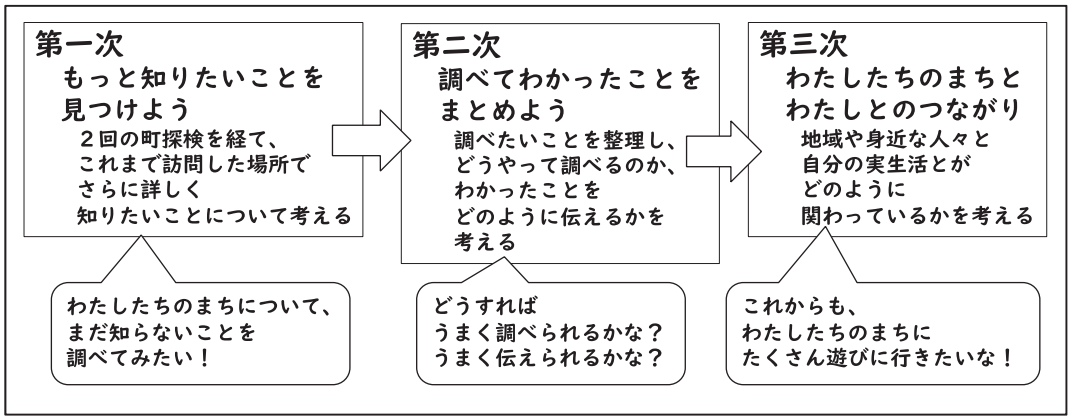


図２　単元の中で子どもがエージェンシーを発揮している姿のイメージ

２－４　第一次　１時間目　まちたんけんでわかったことをふりかえろう

第一次１時間目は、これまでに訪問した施設や店は、どのような場所かについて振り返る場を設定した。ここでの子どもがエージェンシーを発揮するための手立ては、訪問した施設や店の様子の交流による、地域への親しみや思いを想起させる表現活動の設定である。まずは、冬休み前に子どもたちが作成したカルタ（図

３を参照）を使ってみんなで遊び、かるたでの活動を通して、これまでの町探検で分かったことや楽しかった等について振り返る場を設定した。図５は、第一次１時間目の板書である。このような活動を設定することで、子どもたちは、「町探検へ行ったから、室積の色々なことが分かったな。また行ってみたいな。」という「思いや願い」をもっていっていた。

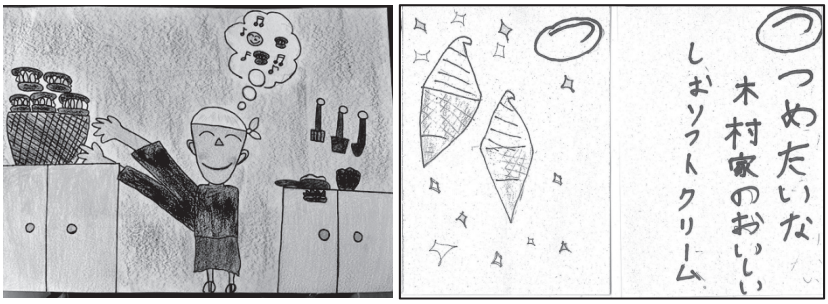


図３　子どもたちがこれまでに作成したカルタ

図４　カルタで遊ぶ様子

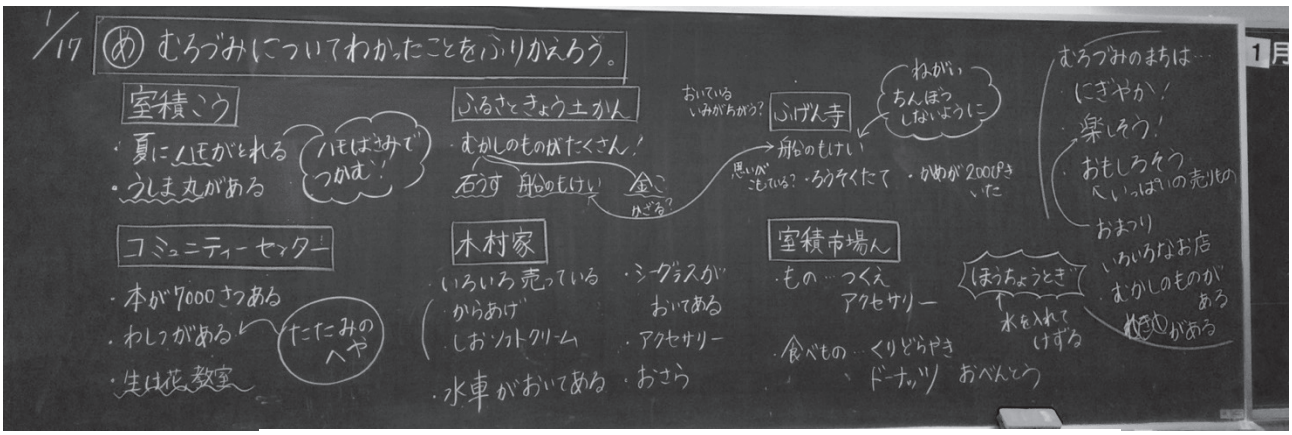


図５　第一次１時間目の板書

２－５　第一次　２時間目　まちたんけんでもっと知りたいことを見つけよう（本時）

２－５－１　本時の主眼

本時の主眼は、「訪問した施設や店について知っていることやもっと知りたいことについて整理する活動を通して、今後どのように活動を進めるかを見通し、地域のことをさらに詳しく知ろうとする『思いや願い』をもつことができる」とした。

２－５－２　本時に行った手立て（具体的な活動や体験の充実）とその効果

本時では、まず、「室積の町には、どんな素敵な場所があったでしょうか」と発問し、町探検に行った経験について話し合い、学んだことを振り返っていった。ここでは、これまでの探検の様子が分かる写真を提示したり、ワークシートや表現物を見て振り返ったりすることで、施設見学で学んだことや楽しかった思い出を想起することができるようにしていった。

次に、「室積の素敵な場所で、疑問や分からないことは何でしょうか」と発問し、訪問した施設や店について、疑問や分からないことについて話し合う場を設定した。ここでは、施設や店についての子どもが知らない情報を提示したり、疑問に思っていることを見比べることができるように板書に整理したりすることで、自分が知らないことを明確にしたり、新たな疑問を見付けたりできるようにしていった。

図６は、第一次２時間目の板書である。図６から分かるように、子どもたちはこれまで以上に室積のことを知っている「むろづみマスター」になっていくために、これまで探検した「室積港」「ふるさと郷土館」「普賢寺」「コミュニティセンター」「木村家」「室積市場ん」に対する新たな疑問を挙げていった。

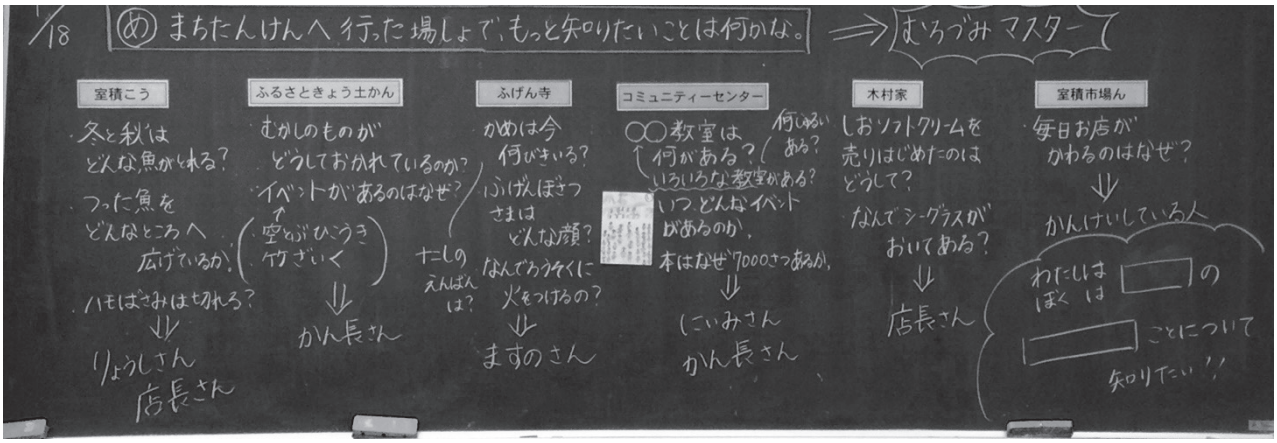


図６　第一次２時間目の板書

子どもたちの疑問がたくさん出てきたところで、「室積の素敵な場所について、誰がどんなことを知っていると思いますか」と発問した。ここでは、図６を見ても分かるように、子どもたちが疑問に思ったことや詳しく知りたいことについて知っている人と施設や店とをつないで板書することで、地域の場所には、そこで生活したり働いたりしている人々がいるということを意識できるようにしていった。

本時の終末には、「室積の素敵な場所について、どんなことを聞いてみたいですか」と発問し、今後調べたいことについて決定する場を設定した。ここでは、詳しく知りたい内容は、誰が知っているのかについて話し合わせることで、地域にいる人々を意識し、これからの活動でさらに詳しく調べていこうとする「思いや願い」をもつことができるようにしていった。図６を見ても分かるように、板書に訪問場所と疑問等、それを解決するために質問をしたらよいと考えた人々が整理されていることで、それが子どもにとっては自分の今後の取組を決定する手がかりとなっていった。子どもたちは、どこを訪問して、誰に質問したら、自分が興味・関心をもったことについて知ることができたりや疑問を感じたことについて解決したりするのか、見通しをもつことができていった。

２－６　二次以降の手立てとその効果に

２－６－１　表現内容や方法の選択・決定できるようになるまでのこれまでの子どもたちの経験

ここでは、二次以降の表現方法の選択・決定に関わる手立てとその効果について述べるが、子どもたちが自分が伝えたい内容と合った表現方法を選択・決定していくためには、これまでにどのような経験を積み重ねてきているのかということが重要になってくる。図７と図８は、子どもたちがこれまでの生活科の学びの中で作成した表現物である。この他にも、すごろくやポスター、エピソードをランキング形式で表したカード等、様々な表現物を作成してきている。

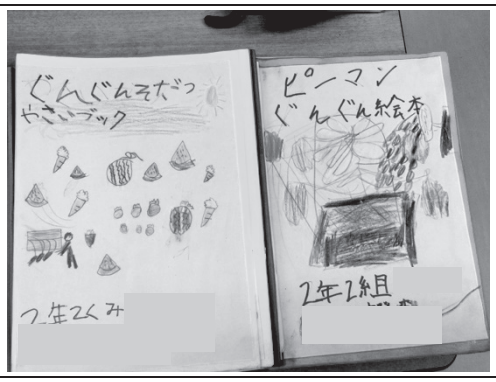
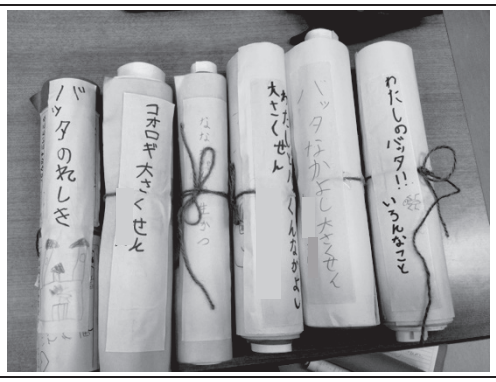
＜本＞…野菜の栽培	＜巻物＞…生き物の飼育
	

図７　子どもたちが野菜の栽培で作成した本と生き物飼育の単元で作成した巻物

２－６－２　本単元における表現内容や方法の選択・決定

子どもの経験が少ない中で表現方法を自由選択させていくと、取組の見通しがもてず戸惑う子どもも出てくるであろう。そのため、小学校第２学年の後半の単元で、子どもがこれまでの経験を生かしていこうとする姿を目指していきたいと考えた。

子どもたちは、図８のような表現物を作成していった。

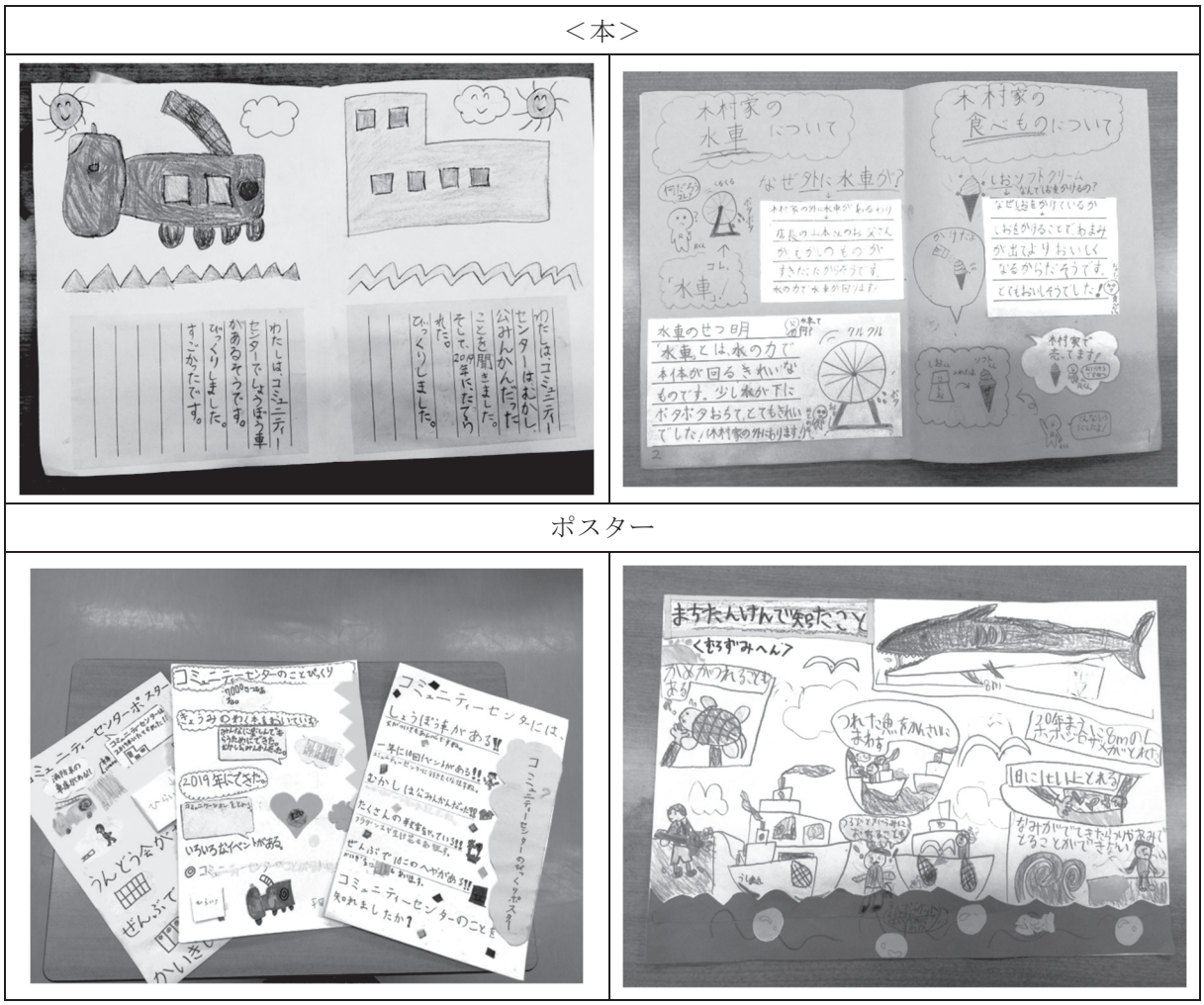


図８　子どもたちが本単元で作成した表現物（本・ポスター等）

これらの表現物を完成させるまでの過程の中で、友達と一緒に町探検について振り返ったり、表現のアイデアを出し合ったりする子どもの姿や、自分のイメージに沿って、伝えたいことを選んで生き生きと制作している子どもの姿、自分が選択した表現方法で満足するまで作成に取り組む姿を見取ることができた。

３．成果と課題

３－１　成果

１年間を通して繰り返し対象と触れ合う活動に取り組んだことで、子どもの地域に対する「思いや願い」が次第に強まる様子を見取ることができた。中には、家族と一緒に休みの日に町探検した店や施設等に訪れる子もおり、その様子を学級で伝え合うことで、さらに「思いや願い」を高めることができたのではないかと考える。

また、これまでの経験を生かしながら、表現内容や方法を選択してまとめるように促すことで、子どもは自分が伝えたいことに合った表現内容や方法を探しながら表現したり、友達に説明したりする姿が見られた。自分が選択した内容や方法であるため、伝え合いの場に至るまでも、友達にアイデアについて相談したり、自分が伝えたいことにふさわしいやり方を探したりしながら、自分が満足するまで取り組もうとする姿が見

られた。

３－２　課題

一次では、「もっと知りたい」という「思いや願い」をもつために、知らないことは何かについて考えさせる場を設定した。しかし、子どもにとって「知らないことは何か」について考えることは難しいことであると感じたため、子どもたちがエージェンシーを発揮するために「もっと！」という思いを強めていくための手立てについて考えていきたい。

また、エージェンシーを発揮する子どもを育成するためには、授業の場の設定に限らず、教室環境の整備や学校生活全体での教員の働きかけ、他教科を含めた様々な体験活動の充実を通して、子どもの選択・決定の幅を広げる必要があると感じた。

おわりに

課題に挙げられているように、まだ知らないことを見つめるという活動は、子どもたちは、これまで得た情報のどの部分に着目して考えたらよいのか、捉えにくい活動である。子どもたちが「もっと知りたい」という「思いや願い」をもつための手立てとしては、「えっ。そんな秘密がまだあったの？」「うそ〜。そんなふうには考えていなかったよ！」等と、子どもたちの既有の知識や概念とのズレを生かしたり、「〇さん（人）と関わるとこんなことまで知ることができたの？」というように、人と関わることによってより深く、また広く地域の魅力に迫っている子どもの事例を挙げたりする等の手立てが有効であったのではないかと考える。しかし、図６の第一次２時間目の板書を見ても、子どもたちが知りたいことをたくさん挙げることができている。これは、「むろづみマスター」になるという「目標・目当て」が共有されていたからこそである。「思いや願い」を「今の自分ががんばれば実現できそうなものこと」（嶋野、2018、p. 214）である「目標・目当て」としてはっきりととらえることができる手立てを行っていたからであると考える。

生活科における実践上の悩みの１つとして、対象と「繰り返しかかわること」が学びを深めるポイントであると言われているのに、同じ時期に何度も町探検に行けないということが挙げられる。

本実践は、別の時期に行った町探検の３つの単元を、図９のように、最初は「もの・こと」に着目しがちな子どもたちが、地域の人々に着目していくことができるようにつなげている。このカリキュラム・マネジメントが、エージェンシーを発揮しながら、進んで地域の人々と関わりながら、地域への愛着を深めていく子どもを生み出していっていたと考える。生活科の授業は、一単位時間やその単元だけの構成を考えるだけなく、子どもの「これまで」と「これから」とつなげながらコーディネートしていく必要がある。そのことを踏まえることで、子どもたちがエージェンシーを発揮する授業づくりへとつながっていく。

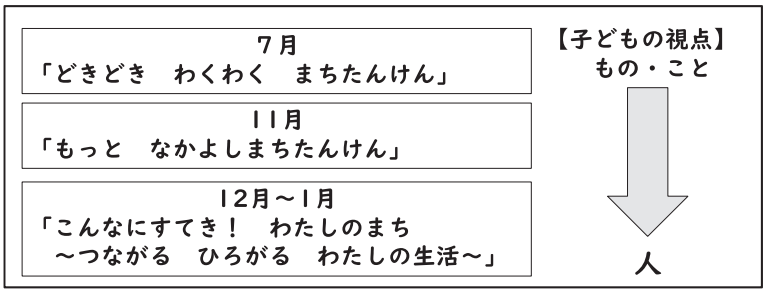


図９　３つの単元のつなげ方

註

本稿は、日本生活科・総合的学習教育学会の第 32 回神奈川大会において、徳永・藤上が連名で発表した実践研究「エージェンシーを発揮する生活科の学び」を論文にまとめたものである。本稿は、徳永が実践研究をしたことをもとにしており、「はじめに」と「おわりに」は藤上、「研究の目的と方法」「研究の実際」「成果と課題」は徳永が執筆した。

参考文献・引用文献

秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下部啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局

教育課程課:「Student Agency for 2030 仮訳」, p.３, 2020.
https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-andlearning/learning/studentagency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf (2023.11.1 確認)
ＯＥＣＤ：「ＯＥＣＤ Future of Education and Skills 2030 Concept Note」, 2019.
https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/Student_Agency_for_2030_concept_note.pdf (2023.12.2 確認)
久野弘幸：「『身近な生活に関わる見方・考え方』とは」, 久野弘幸編・田村学・無藤隆・寶来生志子・久利知光・古島そのえ・今西和子・齋藤博伸・武田文子・金指由香里・大谷敦司・米持武彦・齋藤純, 平成29年版小学校新学習指導要領ポイント整理生活, 東洋館出版社, p.61, 2017.
嶋野道弘：学びの哲学　「学び合い」が実現する究極の授業, 東洋館出版社, p.213, p.214, 2018.
徳永真衣：「第２学年２組生活科学習指導案」, 山口大学教育学部附属光学園小中一貫教育オンライン研究協議会資料, 2023.
徳永真衣・藤上真弓：「エージェンシーを発揮する生活科の学び」,日本生活科・総合的学習教育学会第 32 回全国大会神奈川大会大会紀要, 日本生活科・総合的学習教育学会, p.104, 2023.
文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編, 東洋館出版社, p.８, p.10, p.11, 2018.